

2020. 11. 15 (日) 創世記28:10~22

28:10 ヤコブはベエル・シェバを出て、ハランへと向かった。

28:11 彼はある場所にたどり着き、そこで一夜を明かすことにした。ちょうど日が沈んだからである。彼はその場所で石を取って枕にし、その場所で横になった。

28:12 すると彼は夢を見た。見よ、一つのはしごが地に立てられていた。その上の端は天に届き、見よ、神の使いたちが、そのはしごを上り下りしていた。

28:13 そして、見よ、主がその上に立って、こう言われた。「わたしは、あなたの父アブラハムの神、イサクの神、主である。わたしは、あなたが横たわっているこの地を、あなたとあなたの子孫に与える。

28:14 あなたの子孫は地のちりのように多くなり、あなたは、西へ、東へ、北へ、南へと広がり、地のすべての部族はあなたによって、またあなたの子孫によって祝福される。

28:15 見よ。わたしはあなたとともにいて、あなたがどこへ行っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない。」

28:16 ヤコブは眠りから覚めて、言った。「まことに主はこの場所におられる。それなのに、私はそれを知らなかった。」

28:17 彼は恐れて言った。「この場所は、なんと恐れ多いところだろう。ここは神の家にほかならない。ここは天の門だ。」

28:18 翌朝早く、ヤコブは自分が枕にした石を取り、それを立てて石の柱とし、柱の頭に油を注いだ。

28:19 そしてその場所の名をベテルと呼んだ。その町の名は、もともとはルズであった。

28:20 ヤコブは誓願を立てた。「神が私とともにおられて、私が行くこの旅路を守り、食べるパンと着る衣を下さり、

28:21 無事に父の家に帰らせてくださるなら、主は私の神となり、

28:22 石の柱として立てたこの石は神の家となります。私は、すべてあなたが私に下さる物の十分の一を必ずあなたに献げます。」

<説教>

本日の聖書箇所には、ヤコブが神に「十分の一」のささげ物をするを誓ったことが記されています。

聖書に記されているものとしては、おじいさんのアブラハムに次いで二番目の「十分の一」のささげ物についての出来事です。

ヤコブもやはりアブラハムと同じように、主なる神に感謝して、喜んで、自分から進んで「私は、すべてあなたが私に下さる物の十分の一を必ずあなたに献げます。」と神に誓ったのです。

ヤコブは兄のエサウから長子の権利を奪い(25章)、次いで父イサクを欺いて、エサウが受けるはずだった長子の祝福も奪い取ることにまんまと成功しました(27章)。

しかしそのおかげでエサウから恨まれ殺されそうになってしまいました(27章)。

そこで、母リベカの兄ラバンのところに逃れることになり、「ヤコブはベエル・シェバ

を出て、ハランへと向かった。」(28:10)のです。

それまでは父母のもとで何不自由なく過ごしていたし、ついには長子の権利と祝福まで自分のものとしたヤコブでした。

しかし事は一転、今や一後に「一本の杖しか持たないで…」(32:10)と自ら振り返ったように一無一文の惨めな逃亡者と成り果てていました。

28:11 彼はある場所にたどり着き、そこで一夜を明かすことにした。ちょうど日が沈んだからである。彼はその場所で石を取って枕にし、その場所で横になった。

これから自分は一体どうなるのだろうか、果たしてハランに無事にたどり着くことができるだろうか、そしてそれができたとしても兄の怒りが収まり、自分が兄にしたことを兄が忘れ、父母のもとに帰ることができるようになるのだろうか、ああそもそも兄の怒りを買うようなことなどしなければよかった等々の不安と恐れ、後悔そして孤独感でヤコブは一杯だったでしょう。

そんな惨めなヤコブに主なる神が現れ、みことばを語ってくださいました。

28:12 すると彼は夢を見た。見よ、一つのはしごが地に立てられていた。その上の端は天に届き、見よ、神の使いたちが、そのはしごを上り下りしていた。

28:13 そして、見よ、主がその上に立って、こう言われた。「わたしは、あなたの父アブラハムの神、イサクの神、主である。わたしは、あなたが横たわっているこの地を、あなたとあなたの子孫に与える。

28:14 あなたの子孫は地のちりのように多くなり、あなたは、西へ、東へ、北へ、南へと広がり、地のすべての部族はあなたによって、またあなたの子孫によって祝福される。

28:15 見よ。わたしはあなたとともにいて、あなたがどこへ行っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない。」

「見よ」という言葉が4回も繰り返されます。

それほどすべてがヤコブにとっては思いもよらない、驚くべき、そして(文字通り)有り難いことでした。

27章のヤコブの言動を見ると、父の怒りやのろいを恐れてはいても神に対する恐れのようなものは見られません。

むしろいけしゃあしゃあと「あなたの神、主が私のために、取り計らってくださいましたのです。」(27:20)と神の御名を乱用しているほどです。

そんなこともきっと思い起こしながら、今はもう神にも見捨てられたとヤコブは思っていたことでしょう。

父を欺きだまし、兄から長子の権利と祝福をだまし取った“詐欺師”である自分のような嘘つき泥棒は神にのろわれ捨てられ、人からの報復を恐れて一生びくびくしながら生きるようにされても仕方ありませんでした。

しかし神はヤコブを見捨てず「見よ。わたしはあなたとともにいて、あなたがどこへ行

っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない。」と約束してくださったのです。

28:16 ヤコブは眠りから覚めて、言った。「まことに主はこの場所におられる。それなのに、私はそれを知らなかった。」

28:17 彼は恐れて言った。「この場所は、なんと恐れ多いところだろう。ここは神の家にはほかならない。ここは天の門だ。」

28:18 翌朝早く、ヤコブは自分が枕にした石を取り、それを立てて石の柱とし、柱の頭に油を注いだ。

28:19 そしてその場所の名をベテルと呼んだ。その町の名は、もともとはルズであった。

ベエル・シェバにある父の家には主がおられて、そこは神の家とも言える幸いな家だったが、そこを飛び出た自分はもう当分は神の家には住めないとヤコブは思っていたのでしよう。

しかし神は「わたしはあなたとともにいて…決してあなたを捨てない。」と言われました。

それで、父の家からは出た自分は今「天の門」に、「神の家」の前に一ということは神の御前に一立っている。

こんな自分でもこれからは「神の家」に入れていただき、「神の家」に住まわせていただけなのだ。

そうヤコブは知ったのです。

ヤコブは霊的な「眠り」からも「覚め」たと言っていいでしょう。

そして、喜びと感謝をもって神に誓いました。

28:20 ヤコブは誓願を立てた。「神が私とともにおられて、私が行くこの旅路を守り、食べるパンと着る衣を下さり、

28:21 無事に父の家に帰らせてくださるなら、主は私の神となり、

28:22 石の柱として立てたこの石は神の家となります。私は、すべてあなたが私に下さる物の十分の一を必ずあなたに献げます。」

「…なら」(21)とありますが、それは決して疑いとか仮の話として言っているのではないことは明らかです。

むしろここではヤコブは神の約束(13-15 節)を信じて、必ず神がそうしてくださると知って、約束を感謝して受け取って、喜んで、自分から進んで神に「誓願を立てた」のです。

それはヤコブがそれまで「知らなかった」(16)ことを知ったからでした。

ヤコブは主なる神を知りました。

「神が」「私とともにおられる」こと、「神が」「私が行くこの旅路を守」ってくださること、「神が」「食べるパンと着る衣を下さ」ること、「神が」「無事に父の家に帰らせてくださる」ことを知ったのです。

これは要するに「主」が「私の神とな」ってくださる、いや実はすでにずっと「主は私の神」であられたし、これからもずっと「主は私の神」であられるとヤコブが知ったということでしょう。

ヤコブはここで初めて主なる神を「私の神」と呼びました。

イサクをだましたとき「あなたの神、主」(27:20)と言ったことはありましたが、ここでヤコブは初めて「アブラハムの神、イサクの神、主」を「主は私の神」と知ったのです。

もちろん、実は主なる神はずっと一時も離れることなくヤコブとともにおられ、「わたしはヤコブを愛した。」(マラキ 1:2)と言われるようにヤコブを愛していてくださいました。

そしてヤコブにずっと恵みを与え、ヤコブに良くして下さっていたのです。

しかしヤコブはそのことを知りませんでした(母リベカが自分を愛し、自分に良くしてくれることは知っていましたが)。

でも今や神はヤコブをあわれんでくださり、ヤコブに現れてくださり、祝福の約束を与えてくださいました。

それまではヤコブは自分の知恵と策略で自分を守り、自分の利益だけ考え、手に入れようとして生きて来ました。

父の家で自分に与えられた物だけでは満足できず、兄をだまし、父をだまして兄が受ける祝福や財産を奪い取ろうとしました。

自分が自分がと、自分のこと、自分が祝福されること、人から受けること、自分が欲しい物は不正な手段を用いてでも自分の物にすること、自分の手元に残すことしか考えて来ませんでした。

そんなに欲深くがめつかったヤコブが「私は、すべてあなたが私に下さる物の十分の一を必ずあなたに献げます。」と自分から神に誓い、約束したのです。

それはヤコブが主を自分の神と知ったからです。

その神がヤコブをあふれるばかりに完全に豊かに祝福してくださり、守ってくださると知り、信じたのです。

自分が祝福されることだけを求めていたヤコブに対して神は「地のすべての部族はあなたによって、またあなたの子孫によって祝福される。」と言われました。

しかも「わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない。」と約束されました。

神はヤコブを祝福して終わりではなく、今後どんなことがあっても(成功しても失敗しても)ヤコブを必ず「地のすべての部族」の祝福の基にすると約束して下さったのです。

それでヤコブはそれまでの不安や恐れや惨めな思いから解放されたのです。

「神が」「私とともにおられて、私が行くこの旅路を守り、食べるパンと着る衣を下さり、無事に父の家に帰らせてくださる」のですから、もう自分で自分を守る必要はないと知ったのです。

「無事に」(ベ・シャローム)とは、単に事故無くというだけではなく、「平安のうちに、何一つ不足無く、満ち足りた中で、完全な充足と喜びのうちに」という、神がともにおられるがゆえの祝福に満ちた最高の様子です。

神が私とともにおられる。

それゆえ神が私の面倒を全て見てくださり、人生の歩みを守ってくださいます。

神が私の生活に必要な食べ物、着る物を与えてくださいます。

たとえ私が人生で失敗しても（罪を犯しても）神が回復してくださいます（罪の場合は当然必要な懲らしめは受けるにしても）。

私が考えた策略よりも神が私のために立ててくださっている計画の方が、神の祝福の約束の方が断然素晴らしい。

そのようにヤコブは神が自分を愛していてくださること、恵み深くあわれみ深くあられること、祝福しようとしておられることを知りました。

それで自分も神を愛し、自分中心ではなく神中心に、自分のためでなく神のために、また自分の子孫始め地のすべての部族の祝福のために、自分を神に献げて生きる決意をしたのです。

それでヤコブは「私は、すべてあなたが私に下さる物の十分の一を必ずあなたに献げます。」と神に誓うことができたのです

ヤコブはその時は、後に「一本の杖しか持たないで」(32:10)と振り返ったように、全くの無一文でした。

しかし、神のあふれるばかりに与えてくださる祝福の約束を信じて「私は、すべてあなたが私に下さる物の十分の一を必ずあなたに献げます。」と神に誓ったのです。

自分がかつて持っていた、今持っている、そしてこれから持つ物のすべては神の恵みによって神がくださる賜物だとヤコブは知ったのです。

「十分の一を必ず献げます」と訳された言葉は「十分の一を献げる」という動詞を二度重ねた非常に強い強調表現です。

それまでの、神を知る前のことんがめつく食欲だったヤコブの基準からすれば、「すべて…の十分の一」とは決して小さい比率ではなかったと思います。

しかし今や神を知り、自分に対する神の愛、あわれみ、恵み、祝福の約束を知って信じたヤコブはそんな昔の“古い人”の基準など吹っ飛ばして、自分の神に感謝して、喜んで自分から進んで、「私は、すべてあなたが私に下さる物の十分の一を必ずあなたに献げます。」と告白したのです。

ヤコブが告白したように、すべて神が自分に下さる物の「十分の一」のささげ物（全収入の十分の一献金）は神を知り、神の恵みを知り、神に感謝する人が進んで喜んで献げるものなのです。

それ以外のいかなる意味もありません。

律法学者やパリサイ人に対する主イエスのみことばにあるように、「すべての十分の一」のささげ物をしている人のすべてが神を知り、神の恵みを知り、神に感謝して喜んで進んで献げているのかどうかは人間には分かりません（神と本人だけは知っています）。

しかし、ヤコブのように神を知り、神の恵みを知り、神に感謝するようになった人はすべて、神から与えられた物の「すべての十分の一」（全収入の十分の一）を喜んで進んで献げるのです。

それができるのも、いや、させていただけのもただ神の恵み、祝福の故なのです。

「私はそれを知らなかった」：「私は」（アノヒー）が強調された言い方。

ヤコブとエサウが生まれた後、「この子どもたちは成長した」（創世記 25:27）と書かれている。

「イサクはエサウを愛していた。…しかし、リベカはヤコブを愛していた。」（25:28）とも書かれている。

（マラキ 1:2）「…エサウはヤコブの兄ではなかったか。一主のことば—しかし、わたしはヤコブを愛した。」

35:1 神はヤコブに仰せられた。「立って、ベテルに上り、そこに住みなさい。そしてそこに、あなたが兄エサウから逃れたとき、あなたに現れた神のために祭壇を築きなさい。」

35:2 それで、ヤコブは自分の家族と、自分と一緒にいるすべての者に言った。「あなたが出たところにある異国の神々を取り除き、身をきよめ、衣を着替えなさい。」

35:3 私たちは立って、ベテルに上って行こう。私はそこに、苦難の日に私に答え、私が歩んだ道でともにいてくださった神に、祭壇を築こう。」